

ペントスケアマネジメント

鈴木五月

代表取締役



050-5574-7802

pentascare.com

神奈川県横浜市保土ヶ谷区  
東川島町62-2

### ビジョン

ケアマネジャーの経験を活かして、介護があっても働き続けられる社会を目指し、仕事と介護の両立支援を通じて、個人と組織の未来を守る取り組みを行っています。

高齢化の進行とともに深刻化する「介護離職」。働きながら家族の介護を担う人が増える中で、仕事と介護の両立支援は社会的課題となっています。横浜市でこの課題に真正面から向き合っているのが、ペントスケアマネジメント株式会社代表・鈴木五月氏です。ワークサポートケアマネジャーとして、企業と介護の現場をつなぎ、「ワークサポートかながわ」を通じた支援体制を構築。なぜ介護離職防止に取り組むのか、その原点と実践、そして今後の展望についてお話を伺いました(2026年3月取材)。

## 介護離職防止の原点 | 認知症の祖父の介護が福祉の道を志したきっかけ

### 介護・福祉の道を志したきっかけをおしえてください。

私は長野県佐久市で生まれ、高校を卒業するまで地元で育ち、介護や福祉の仕事に関心を持つようになったのは、同居していた祖父が認知症を発症したことがきっかけでした。

祖父はもともと自由奔放な性格の人だったのですが、認知症の症状が進むにつれて行動がさらに予測できなくなり、義足で不安定な歩行なのに突然徘徊したり、黙って高速バスに乗って東京に住む叔母の家まで行ってしまったりすることがありました。

また、姿が見えないと思ったら、庭の梅の木の下でビールを飲んで寝ていたこともあり、家族としては常に気が抜けな状況でした。

祖父の状況と仕事のストレスにより、母は円形脱毛症になってしまうほどでした。

そんな母の姿や祖父の様子を見ているうちに、「もし自分の親が介護を必要とする状況になったとき、同じような苦労を繰り返したくない」という思いが芽生えるようになり、そのためにはまず介護や福祉についてきちんと学ぶ必要があるのではないかと考えるようになったのです。

ちょうどその頃、関東学院大学文学部社会学科に公募制推薦入試があり、高齢者福祉について学べる環境が整っていることを知りました。

そこで、大学では社会学とともに高齢者福祉について学びたいと思い、関東学院大学文学部社会学科へ進学しました。

### 大学進学の間には、すでに福祉の仕事に進むことを決めていたのでしょうか。

介護福祉の分野を学ぶつもりで大学に進学したのですが、大学に在学している間に宅地建物取引士の資格も取得し、当時は「福祉の道に進むか、それとも不動産業界に進むか」という選択で少し悩んでいた時期もありました。

それというのも、私はもともと不動産の間取り図を見るのが好きで、渡辺篤史さんの「建もの探訪」



のような住宅番組をよく見ており、住宅の構造や空間の使い方を見るのが純粋に楽しかったので、いつか不動産の仕事にも関わってみたいと思うこともありました。

しかし、社会福祉士の実習で特別養護老人ホームを訪れ、実際の介護の現場を経験したことで、気持ちが大きく変わりました。

利用者の方々と直接関わりながら介護の仕事を体験したとき、「やはり介護に携わりたい」という思いが強まり、最終的には福祉の道へ進むことを決意しました。

大学卒業後の進路については、いわゆる就職活動を本格的に行ったわけではなく、ゼミの教授からの紹介で横須賀にある社会福祉法人「恵徳会」への就職が決まりました。

当時の恵徳会は現在のような大規模な施設ではなく、山の上にある50床ほどの特別養護老人ホームでした。私が退職した後に横須賀中央駅近くへ移転し、施設規模や事業も拡大されたと聞いています。



## 入職された当初は、具体的にどのようなお仕事をされていたんですか？

大学4年生の9月か10月頃に面接を受け、その後まずはアルバイトとして週3〜4日ほど施設で働き始めました。

ちょうどその頃、前任の生活相談員が退職されたばかりで、介護リーダーの方が相談員業務を兼務している状況でしたので、アルバイトの段階からレセプト業務などの事務作業を少しずつ教えていただきながら仕事を覚えていきました。

そして大学を卒業し、社会福祉士の国家試験に合格して正式に入職すると、50名の入居者がいる施設で生活相談員が一人しかいないという状況の中、いきなりその役割を任されることになりました。

今振り返るとかなり思い切った配置だったと思いますが、当時は「この職種は自分一人」という環境の中で必死に仕事を覚えていくしかありませんでした。

業務内容は非常に幅広く、新しく入所される方の面談やご家族との調整はもちろん、当時は身寄りのない入所者の方の預かり金の管理、施設内の行事の企画や運営、入所者の方が入退院する際の付き添いなど、生活相談員として担う役割は多岐にわたっていました。

さらに当時はまだ車の免許を取得して間もない頃で、運転にもあまり慣れていませんでしたが、「病院まで付き添ってきて」と言われて車を出すことがあり、横須賀の地理もよく分からない状態で運転していました。

今のようにカーナビもなかったため、ゼンリンの住宅地図を広げ、それを頼りに目的地を探しながら移動していたのをよく覚えています。

## 入居者50名を一人で担当する生活相談員は大変だったのではないですか。

確かに仕事量は多かったのですが、入職してまだ1年目だったこともあり、施設長代理が大学のゼミの教授とつながりのある方だったため、とても大事に育ててもらったという実感があります。

周囲の職員の方々も温かくサポートしてくださったので、何とか仕事を続けることができましたが、入職して1年ほど経った頃に突然「来年からデイサービスを立ち上げるので、そちらに異動してほしい」と言われたんです...



続きはQRコードからアクセスしてください → → →

